

フィクションが活用する方言イメージ —なぜ静岡方言は使用されにくいのか?—

熊谷 滋子

要 旨

方言がフィクションで利用されることはよくあるが、具体的な作品をみてみると、今でも標準語や「女ことば」が中心に用いられ、さらに方言使用にも序列があることが分かる。東北、関西、そして静岡を舞台とする地域ドラマと内田康夫の旅情ミステリー作品を対象に、方言がいかに表象されているのか調査した結果、関西方言は主要な役を含め、出身者でなくとも用いることもあるほど肯定的に描かれている。一方、東北方言は田舎のイメージを引き出すために端役中心に用いられる程度で、静岡方言にいたってはさらに限定的で、全く使用されないことが多い。静岡という地域のイメージがそれほど田舎性を帯びていないのに、具体的な静岡方言が田舎のイメージをもっているため、使用が制限されていると思われる。方言は地域アピールとして有効な場合に限り使用されることが分かった。このようにして、フィクションでの使用・不使用を通して方言イメージが再生産されていく。

キーワード：標準語、「女ことば」、方言イメージ、地域ドラマ、旅情ミステリー作品

1. はじめに

熊谷（2017）において、東北と関西を舞台にした地域ドラマ（『私の青おに』（山形を舞台）、『アオゾラカット』（大阪を舞台）2017年NHK）を分析し、田中（2016：102-103）が実施した調査で明らかになった「東北＝素朴、温かい」「大阪＝おもしろい、怖い」という方言イメージがベースにあるドラマ作りがなされていることを示した。今回は、2018年に放送された静岡県（厳密には旧清水市）を舞台とした地域ドラマ『プラスチック・スマイル』と旅情ミステリーで知られた内田康夫の小説を調査対象に加え、フィクションの中での東北方言、関西方言、そして静岡方言が、どのようなイメージで

表象されているのか考察する。また、静岡大学の学生に『プラスチック・スマイル』を視聴してもらい、静岡方言についてどう感じるのか調査したのもまとめる。

方言の名称について一言述べておきたい。今回比較対象とする地域ドラマの方言は、より細かくいえば、それぞれ山形方言、大阪方言、静岡方言である。方言区画をもとにより大きな括りで言えば、それぞれ東北方言、近畿方言、東海東山方言となる。方言イメージを扱う関係上、よりわかりやすくするため、今回は便宜上、東北方言、関西方言、静岡方言という名称を採用する。静岡という県名を採用したのは、東海地域という括りもあるものの、東海三県（愛知、岐阜、三重）として静岡を除く場合もあり、東海という括りではイメージしにくいと、他の2方言と違い、一県に特定して調査分析したいためである⁽¹⁾。また、静岡方言といっても静岡独自の方言ということではなく、あくまで静岡で使われているという程度の大雑把なものを指す。

2. 地域ドラマ『プラスチック・スマイル』

2017年に放送された2作品については熊谷（2017）でまとめているため、今回は静岡市清水区を舞台にした『プラスチック・スマイル』（NHKが2018年11月16日に静岡県内で先行放送したものを対象とする、60分）について説明する。このドラマは、静岡県出身の人気アイドル百田夏菜子（ももいろクローバーZ）をヒロインに起用し、また、静岡大学出身の女性も同僚として出演している。ドラマには、茶、清水港、富士山、三保の松原、久能山東照宮、サッカー、プラモデル（毎年、ホビーショウを開催）、コスプレ（毎年、清水区で世界コスプレ大会を開催）などが登場し、他の地域ドラマと同様に、静岡の観光案内となっている。また、今回はとりわけサブカルチャーに特化した内容となっている。

2.1 あらすじ

熊谷（2017）で扱った地域ドラマと同様に、このドラマも、家族、友人、そして会社に対するわだかまりを抱えた若者が、あるきっかけで自分を見つ

めなおし、元気を取り戻すというものである。主人公は、静岡で代々営まれてきたプラモデル会社に勤務する林田紬である。社員として（労働時間の徹底管理を社長から指示されるが、ある男性の同僚に抵抗される）、コスプレ仲間として（主人公の趣味がコスプレであり、原作に忠実なコスプレヤーを目指すあまり、仲間からは敬遠される）、さらに娘として（両親の離婚の原因が自分にあると思込んでいる）葛藤を抱え、上辺だけの笑顔をみせながら強がって生きてきたが、本音をおつけあう中で元気になる物語である。

2.2 静岡方言の使用者と具体例

このドラマの登場人物は、主人公、その父、離婚した母（回想シーンのみ）、勤務先の社長、同僚たち、コスプレ仲間（女性4人）とカメラマン、同僚の妻、主人公のコスプレのキャラクター原作者である漫画家、そしてエキストラの地元の人たちである。その中で、静岡方言を使用するのは、主人公とその父のみで、しかも自宅に二人でいるときに限られる。ちなみに父は清水港で荷物の積み下ろしを監督する作業員である。

使用された静岡方言は、アクセント、語彙は全くなく、動詞の否定形式、文末詞、接続助詞程度で少ない。具体例をあげると、動詞の否定形式のテ形（なれんくて（なれなくて）⁽²⁾）、助動詞「だ」への用言の直接接続（「知ってただ」）、推量を表す「ら／だら」（そんなことはないら）、疑問を表す「け」（お前も飲むけ）、接続助詞「で」の文末詞的用法（これ食ったら寝るで）などである。これらの表現は静岡県内だけのものではなく、中部や東海地域に広く使用されているものだが、特に、「ら／ずら」に関して、山口（1987：149-153）は、静岡県全域で使用され、使い分けもはっきりしているため、静岡が「その本場だといえる」と述べている。ただし、このドラマでは「ずら」は使用されていない。

まとめると、静岡方言は主人公とその父が家で会話する時のみ用いられるものであり、勤務先でも、コスプレ仲間にも誰にも使われない。アクセントや語彙レベルの例はなく、ごく限定的な表現にとどまっている。

2.3 他の地域ドラマとの比較

『プラスチック・スマイル』と他の2作品を使用言語から比較する。表1に示したように、登場人物の方言の使用には差異がある。今回、「女ことば」とは、「わ」「の」「かしら」などの、いわゆる女性文末詞を含む言葉遣いをさし、標準語とは区別して項目をたてる。

表1 ドラマ3作品における方言話者と標準語や「女ことば」の話者

	アオゾラカット (関西方言)	私の青おに (東北方言)	プラスチック・ スマイル (静岡方言)
方言使用者	・基本的に全員	・中高年の地元男女 ・主人公の父母 ・主人公の同級生 (いじめ役) ・主人公の親友の父	・主人公 (家でのみ) ・主人公の父 (家でのみ)
標準語使用者	・銀行員 ・全国チェーン店の 社員 ・主人公 (葬式の挨拶の場面 や英語の翻訳字幕 のみ)	・主人公 (元恋人の 作家や学芸員以外 と話す時) ・元恋人で作家 ・学芸員 ・同級生で親友 ・若いイラストレー ター	・主人公 (家以外) ・会社の社長 ・同僚たち ・コスプレ仲間 ・漫画家
「女ことば」 使用者	・女性の外国人客 (翻訳字幕)	・主人公 (元恋人の 作家や学芸員と話 す時)	・主人公の母 (回想) ・同僚の妻
使用された 方言	音、語彙、否定表現、 文末詞、敬語など	濁音、文末詞、語彙 (1つのみ)	否定表現、接続助詞、 文末詞

表1から、関西方言は全員が使用しており、表現も多岐にわたっていることがわかる。それは、関西方言が全国的によく知られ、若者に人気があり、肯定的なイメージがあるためである。一方、東北方言は主要な登場人物（主人公やその親友、若いイラストレーター、さらには知的な職業についている男性（作家、学芸員））は使用せず、端役（地元の中高年など）のみが濁音や限定的な表現を使用する程度である。東北方言は田舎のイメージが強くなるため、主要な役柄、特に若い女性などには似合わないが、端役に使用させることによって、東北を舞台としていることをアピールしているのである。

静岡方言は主人公と父との会話で使用されるのみで、しかもごくわずかな表現にとどまっている。関西方言や東北方言に比べて、そもそも静岡方言のイメージが薄い中であって、知られている静岡方言は「ら／だら」などのような田舎のイメージが濃いものであり、プラモデルやコスプレといった若者文化のトーンに合わないためではないかと考えられる。つまり、ここで見た地域ドラマ3作品の方言活用は、方言イメージの濃さと、地域と方言のイメージの合致度から、関西方言、東北方言、静岡方言の順に少なくなっている。これは、熊谷（2017）でも述べたが、現代日本社会においては、今でも標準語や「女ことば」が中心であり、さらに、方言に序列があるということを示している。関西方言は方言の中でも肯定的なイメージがもっとも強く、どの人物にも使用できるが、東北方言や静岡方言は、田舎のイメージが濃く、主人公や主要な役柄の人物のイメージには合わない。さらに、静岡方言についていえば、次の節でみる学生アンケートから明らかのように、静岡は都会でもないが田舎でもないという、あまり特徴のない地域イメージしかないのに、具体的な静岡方言は田舎のイメージをもっているため、それらにイメージのギャップがあり、かならずしも地域をアピールするものとはならないといえそうだ。方言がメディアで活用されるようになって久しいわりに、地域をアピールするドラマでも方言活用には差があることが確認できる。

2.4 静岡大学の学生による静岡方言イメージ

『プラスチック・スマイル』を、静岡大学の学生に視聴してもらいながら、静岡方言に対するイメージとドラマでの方言イメージについて調査を行った⁽³⁾。なお、調査にあたっては、県内出身者と県外出身者に分けた。以下ではコメントを中心にあげていく。

2.4.1 ドラマ視聴前に

まず、ドラマを視聴する前に、静岡方言のイメージについて尋ねた。県内出身者、県外出身者ともに、全体的に「都会ではないが田舎すぎず、共通語に近く、あまり方言特徴がない」「おだやかでおっとりしている」とする一

方、県内出身者は、「かわいくない、女らしくない、ださい」と感じ、「使うのをやめなさいと親から注意をうける女の友人が多い」とも述べている。さらに「田舎っぽいイメージ」があり、「「だ／だら」「だもんで」が汚い」、「口悪いね」と言われた経験がある。「関東方面に進学した友人は方言がでないように気をつける」そうだ⁽⁴⁾。メディアでの静岡方言については、「あまり取り上げられることはないが、たまに取り上げられると、老人が話していて、実際よりもなまりが強く、きつく怒っているように話している」と述べ、「不自然な使われ方をしている」と感じている。一方、県外出身者は、「静岡に来てから、意外に方言がある」と思うようになり、「おいしいところでなまっている」と感じている。「おいしい」というのは、静岡のことばは共通語のイメージがあったが、実際に静岡に住み、静岡方言を耳にしてみると意外にも田舎っぽく響く方言のある地域だと感じるためだと思われる。住む前は、静岡のことをあまり田舎だと思っていなかったためだろう。

まとめると、静岡方言に対するイメージは、共通語に近く、強いイメージはないとしつつも⁽⁵⁾、県内出身者は特に田舎っぽいなどのマイナスイメージがあり、経験上あまり堂々と使える方言ではないと感じている。

2.4.2 ドラマ視聴後に

ドラマを視聴した後に、ドラマで描かれる静岡方言のイメージをあらためて尋ねた。全体としては、県外出身者も県内出身者も静岡方言が田舎のイメージをもつものとして描かれているとしている。特に、県外出身者にとっては、「意外に方言が強く、東京に近いが、特徴的な方言のある町というイメージ」があり、「男の人（主人公の父）がより方言を使うもの」だと感じている。

さらに、多く出されたコメントを2つあげる。1つめは、主人公の勤務先となっているプラモデル会社で働く人たちの言葉遣いについてである。静岡で代々営まれてきた会社の社長が標準語を早口で話すことについて、静岡らしさがなく、もしかして静岡出身の人ではないと感じ、代々続いてきたわりには、社長が地元の方言をいっさい使わないのは不自然だと思っている。ま

た、社員は30人ぐらいいるが、誰も方言を話さないことから、静岡出身者もいるはずなのに、方言を話さないのはおかしいとも感じている。

2つめは、主人公の趣味友達であるコスプレ仲間の女性たちについてである。彼女らは誰も方言を話さない。むしろ敬語を使ったりして、上下関係を意識させる話し方をしている。県外出身者は、「静岡出身の女性たちはよく方言で話している」と述べ、いつも一緒にいる地元出身者であれば方言がでてこないのは不自然だと思っている。女性たちの仲がそれほど親密ではないのかと勘ぐってしまうほど、よそよそしい言葉遣いをしていると感じている。

以上をまとめると、静岡が舞台なのに、方言を使う人が2人だけなのは少なすぎるといえるものである。

次に、具体的な方言については、違和感がないというコメントも中にはあるが、やはりどこか不自然だといえるものが多かった。県外出身者は、使われた方言が「聞きなれない」「正しいかどうかわからない」とするものや、「[だら]」を喧嘩の場面で使うかどうか疑問」だとしている。県内出身者は、「文末のみでイントネーションが方言になっていない」とし、アクセントレベルでも静岡方言には特徴があるのだが、それが全くみられないということを指摘している。全体として、使われた静岡方言については、県内出身者も県外出身者も「[だら]」を多用し、それで余計に女性にはふさわしくない、気の強いイメージ、もしくは、田舎っぽいイメージがする」というコメントが多く出された。

「ら／だら」は、前述したように、静岡方言を特徴づけるものである。この表現が使われた会話の一部を以下に引用する。太字が該当部分である。

(1) 母が父と子育てでケンカする場面（回想）

母「私が悪いっていうの？**袖が言うこと**きかないのも私のせいなの？」

父「ゆうこと聞かんでも子どもだから当たり前だら」

母「あの子はいい子にしてるわよ」

父「そんなことはないら」

母「あなたが知らないだけよ。仕事、仕事っていつも家にいないんだから。」

私がどれだけ苦労していると思っているのよ」

(2) 主人公が父に離婚の理由について問いたず場面

主人公「お母さん、私のせいで出たっただら？」

父「ばかだよ、お前。そんな風に思ってたか」

(中略)

主人公「やっぱり、私がいい子じゃなかったもので、私がいい子だったら、

お母さん、悩んだりしなかったし、出てかんでもよかっただら」

父「違うよ。お前はいい子だよ。本当にいい子だったで」

(中略)

主人公「だから私から逃げただら。逃げ出したってことだら」

父「逃がしてやるしかなかったで」

「ら／だら」は、(1) では父が、(2) では主人公が使用している。相手にきつく言う場面での方言使用が先の学生のコメントにつながっていく。

加えて、親子という親密な場面で方言を使用していることから、方言が親密さ、本音を表すことばになっているという、現代の方言観にそった感想もある。

2.5 まとめ

すでに述べたように、舞台となった静岡市は、東京圏と名古屋圏にはさまれ、大都市圏周辺の地域に共通するイメージ、つまり都会でもないが田舎でもないといった、いわば特徴的なイメージがあまりない地域（あえていえば、温暖）と思われ、それゆえ方言イメージも薄い地域だとされている。井上（1989：239）が大学生に実施した方言イメージ調査でも、静岡は知的にも情的にもあまり特徴がなく、どちらかといえば「東京寄り」になっているという。また、首都圏に通う大学生を対象にアンケート調査をした田中（2011：28）によると、「ニセ方言」として使用したことのある方言の中に、静岡方言もあげられているが、具体的なイメージは記載されていない。田中

の調査で1位になったのは大阪方言で、イメージは「おもしろい、怖い、かっこいい、男らしい」などである。このように、これとって特徴的なイメージがない静岡方言だが、全国的に知られているのは「ら／だら／ずら」ぐらいで、これらが田舎っぽく響くのだろう。

繰り返すが、県外出身者は静岡に住んではじめて、静岡にも方言があることに気づかされたと言っている。実際に住んでみないとその土地のことがわからないのはきわめて当然であるが、フィクションの世界ではおうおうにして、地域方言についての従来のイメージをもとに作品を作り上げていることが今回のドラマにもあてはまるといえよう。若者が主人公となり、サブカルチャーをテーマにした地域ドラマのため、田舎イメージの強い静岡方言を使用するのを極力控えたのではないかと考えられる⁽⁶⁾。

3. 旅情ミステリー作品：内田康夫の小説にみる方言使用

全国各地を舞台に展開する殺人事件を扱った推理小説は多くあるが、中でもテレビドラマとしてシリーズ化までされてきたものとして、西村京太郎や内田康夫などの小説がある。このうち、西村京太郎の小説はどの地域が舞台でも会話に方言が用いられないため、今回は内田康夫の小説を分析する。

3.1 調査対象作品

内田康夫（1934～2018）は東京都出身だが、秋田、長野、静岡などに住んだこともある。フリーのルポライターが難事件を解決する浅見光彦シリーズが有名で、自身で「浅見光彦友の会」をつくり、全国の会員に小説で使用する方言のチェックなどもお願いしているという⁽⁷⁾。静岡を舞台とする作品も少なくなく、仕事を伊豆の網代にかまえたこともあるという。

今回は、地域ドラマで対象とした東北方言、関西方言、そして静岡方言の使用を比較検討するため、以下の小説（15冊）を調査する。舞台として東北が登場する作品が8冊、静岡が5冊、関西が4冊である。以下にあげた作品のタイトルの後の府県名・都市名は東京以外で舞台となった地域であり、会話に方言が使用された地域を太字で示す。

『秋田殺人事件』 秋田 『遠野殺人事件』 岩手
『杜の都殺人事件』 宮城、山形 『^{くれない}紅 ^{ひと}藍の女』 殺人事件』 山形
『悪魔の種子』 秋田、新潟、茨城 『朝日殺人事件』 新潟、山形、富山
『中央構造帯』 静岡、茨城、埼玉 『天城峠殺人事件』 静岡、岩手
『喪われた道』 静岡 『^{ひな}鄙の記憶』 静岡、秋田
『日蓮伝説殺人事件』 山梨、千葉、静岡 『御堂筋殺人事件』 大阪
『白鳥殺人事件』 新潟、岐阜、大阪 『遺譜 上』 京都、奈良、神戸
『ユタが愛した探偵』 滋賀、沖縄

3.2 登場人物の言語使用

調査した小説について、標準語や「女ことば」使用者、方言使用者、金水(2003)であげられていた役割語の1つである「博士語」使用者、そして、それぞれの使用地域と具体例、イメージなどを次ページの表2にまとめた。

内田康夫の小説における言語使用と役柄の関係についてまとめる。1つめは、金水(2003)で指摘されているが、主人公、あるいは主要な役柄には原則「標準語」、もしくは「博士語」を用い、女性の場合には、「女ことば」を用いる場合があるということである。どの地域を舞台にしようとも、たとえ東北方言地域である仙台や遠野を舞台にしているとしても、主要な役柄であれば、地元出身で地元に住んでいる女性でも、見事な「女ことば」を話している。

2つめは、関西方言は方言の中でも中心的なものであるということである。主要な役柄の女性(たとえば、『御堂筋殺人事件』の畑中有紀子)も、「女ことば」とともに関西方言を話している。(3)では、太字の部分が関西方言、波線の部分が「女ことば」を示す。

(3)

「慣れよ、そんなもの、少し経てば、誰かてそれらしくなってくるものよ」
「だめなことあらへんて、コスモの専属は三人やし、可能性は十分あるわよ」

(『御堂筋殺人事件』 pp. 9-10)

表2 内田康夫の小説にみる登場人物の使用言語と役柄

	役柄	使用地域	使用される方言例	イメージ
標準使用者	・主人公 例) 浅見 ・主要な役や地位のある男女	・全国		ヒーロー ヒロイン
「女ごとば」使用者	・浅見とともに事件解決 ・女将、由緒ある女性 ・被害者の妻や娘	・全国		ヒロイン 美人、女らしい、賢い、控えめ
「博士語」使用者	・中高年 ・権威者 例) 住職、知事、医者	・全国	さよう、～かね ～ぞ、わし、 西日本的方言	地位がある、 上司、由緒ある
関西方言使用者	・主要な役 ・端役 ・男女 ・すべての階層	・地元 ・関西出身者が他地域で使用 ・他地域出身者が東京で使用	文末詞、接続詞、否定表現、語彙、敬語など多岐にわたる	面白い、そつがない、エリート
東北方言使用者	・端役（中高年） 例) 運転手、地位の低い刑事	・地元 ・東京で使用する場合は、同郷人としてなつかしさを表わす時に使用	文末詞、方向の「さ」、接続詞「だば」、わずかな語彙、静岡／中部方言や西日本方言の混在	年寄、実直、融通がきかない 田舎者、朴訥
静岡方言使用者	・端役（中高年）	・地元	文末詞、接続詞「だもんで」	年寄、実直、 田舎者

また、関西在住者のみならず、関西出身で沖縄在住者なども関西方言を話している⁽⁸⁾。関西方言話者は、自身の方言をどの地域でも使用するというイメージがここでも確認できる。さらに、驚くことに、『中央構造帯』では、「高校時代まで静岡県富士市で育ったが、大阪大学に入ってからロサンゼルスへ行くまでの約二十年間は、途中二度、広島と福岡の支店に出た以外の正味十五年間、大阪で生活し」てきた、銀行勤務の男性（川本康助）が「東京本店へ行っても、あえて大阪弁で通そうとする反骨精神のようなものがあり、以下のような関西方言を、同僚に対して東京本店で用いている。

(4)

「いや、そういうのがあるというのは聞いたが、あまり詳しいことは知らんのだ」

「そうか、これが何やらの乱いうのを起こした謀叛人の成れの果てやな」

(『中央構造帯』 p. 91)

反骨精神があるのなら、なぜ生まれ故郷の静岡方言を使用しないのかと勘ぐるが、あえて「大阪弁」を社内で使用するということには、方言イメージが関係しているように思われる。地域ドラマで指摘したように、静岡方言の具体的な表現は田舎のイメージが濃く、この男性のように「反骨精神」をもつエリート街道まっしぐらの男性には合わないのだ。

3つめに、東北方言については、関西方言とは異なり、地元の老人、農民、タクシーの運転手や地位の低い刑事など、端役しか使用していない。そのことから、東北方言が関西方言より下位に位置づけられているということがわかる。加えて、具体的な方言についていうと、会員に方言チェックもしてもらっているとのことだが、静岡方言を含む中部方言的なもの、西日本方言、そしてステレオタイプの田舎言葉が混在しており、全体的にフィクションや翻訳で用いられる「疑似東北弁」が用いられている。内田康夫は中学時代に秋田に住んだことがあり、秋田の人とは方言で会話ができるらしいのだが⁽⁹⁾。以下に、「疑似東北弁」の例として、秋田に住んでいる刑事のことは(5)と仙台に住んでいる人のことは(6)をあげる。太字の部分に注目してほしい。

(5)

「おれはこういう暮らしだもんで、親しい付き合いはしねかっただが」

「おれはただ殺すことしか考えられねえようになってしまっただよ」

(『鄙の記憶』 pp. 355-361)

(6)

「メーターが上がるばかりだで」

「ここさは帰ってこねえつって出て行きよったですから」

(『杜の都殺人事件』 pp. 36-184)

「だもんで」「ただが」「しまっただよ」「だで」などは(7)であげる静岡方言の特徴であり、「行きよった」は西日本方言の特徴である。いずれにしる、東北方言は「疑似」であっても、東北という田舎が舞台になっていることを示せばいいのだろう。

4つめに、静岡方言については、地域ドラマと同様、静岡が舞台になっていても、基本的に方言が用いられず、通りすがりの地元の老人、通行人、タクシーの運転手が短めに使うぐらいである。以下の例は、「村の人間」(特に老人)のことばである。太字が方言部分である。

(7)

「あのごまだら、どっちみち死ぬことになるずら」

「要塞か何か知んねけど、あそこの山の上のほうに行けば、洞穴が開いてるずら」

「だもんで、それから長えこと、この話は誰にも言わねかっただ」

(『中央構造帯』 pp. 7-380)

ちなみに、第一部が静岡、第二部が秋田を舞台とした『^{ひな}鄙の記憶』をみると、静岡では「地元の土産物店のおばさん」も誰も方言は使用していない。一方、秋田では、タクシー運転手、地元の老人、釣具店の「おばさんタイプの女性」、ビルのオーナー、共犯者の元刑事など少なくない人が方言を使用している。特に、(5)で例示した、事件の共犯者となっている元刑事の告白は、何ページにもわたって方言で語られている。つまり、秋田を舞台にする方が方言をより活用しているということである。田舎のイメージを強くもつ東北方言は東北という舞台とイメージが合致するのだろうが、田舎の

イメージが意外にも強く響く静岡方言は都会でもなく田舎でもないという静岡のイメージと合致しないのだろう。

3.3 まとめ

内田康夫の小説についてまとめると、まず「標準語」や「女ことば」中心であり、その上で、関西方言、東北方言、静岡方言の順で下位に位置づけられ、下位にいくほど端役などにしか用いられない方言となっている。特に静岡方言については、これまで述べてきたように、静岡という土地のイメージと、具体的な静岡方言のもつ響きのずれが静岡方言の使用を控えるようになっていないかと思われる。

4. おわりに なぜ静岡方言は使用されにくいのか

今回対象とした地域ドラマも内田康夫の小説も、まず、「標準語」や「女ことば」中心主義であることが確認できる。主要な役柄には基本的に標準語か「女ことば」が割り当てられている。その上で、方言については、序列がある。大阪を舞台とした『アオゾラカット』では、基本的に誰もが関西方言を話し、内田康夫の作品においても十分にそのことがあてはまる。関西出身者は他の地域でも、あるいは、母方言でなくとも、堂々と方言を用いることができる。さらに、主要な役柄の女性でも「女ことば」に加えて関西方言も使用する。一方、東北方言は田舎のイメージを添えるために、脇役を中心に使用される程度で、『私の青おに』や内田作品でみたように、主要な役柄、特に女性には使用されない。東北方言がそれらの女性のイメージに似合わないためである。井上（1977ab）で調査された1970年代の方言イメージが今でもしっかりと継承されているということになる。

静岡方言はさらに使用が少ない。『プラスチック・スマイル』では、若者を主人公とし、サブカルチャーを題材に取り上げているために、田舎っぽいイメージを与える方言の使用が抑えられたと考えたが、内田作品と合わせて考えなおしてみると、田舎イメージが意外に濃い具体的な静岡方言が、都会でもなく田舎でもないという静岡のイメージとのずれがあるため、方言の

使用を控えてしまうのではないかとと思われる。つまり、静岡方言は静岡という地域性をアピールするアイテムとして期待されていないということなのだ。したがって、特に静岡方言の場合はフィクションでの不使用という形をとって、方言イメージが再生産されていくものとする。つまり、田舎イメージの濃い「ら／だら／ずら」という表現程度しか知られていない静岡方言が、作品の中でそのイメージに合う場合以外は極力使用されず、結果としてイメージの希薄な方言として流通させられてしまっているということである。

まとめると、メディアにおいて方言を活用するのは、舞台となる地域のアピールとして有効な場合に限られるということである。しかもそれはステレオタイプに沿うものを中心としている。方言の活用が、関西地域では最も有効、東北地域では中くらい、そして静岡地域ではあまり有効ではないということになる。その他の地域方言もこの3分類のどこかにあてはまるのではないだろうか⁽¹⁰⁾。

注

- (1) 静岡県内は東部、中部、西部の3つに分かれ、方言としては、それぞれ伊豆方言、駿河方言、遠州方言という名称があるが、今回は、細かく分けずに静岡方言とする。
- (2) これは関西方言でも使われる表現（標準語の干渉によって生まれたネオ方言のひとつ）である。静岡県内では主に西部地域で使用されているものである（加藤1998）。主人公とその父親役の俳優が静岡の西部出身であるため（ドラマ作りについてのインタビューにおいて、俳優自身がせりふ部分を方言になおしたと語っている）、どちらかという「遠州弁」といわれる西部の方言となっているようだ。この点は、県内出身者も指摘している。舞台が静岡市清水区という中部地域なので、少し違和感をもったようである。
- (3) 調査は2018年と2019年に3～4年生を対象に実施した。県内出身者が14名、県外出身者が30名の計44名である。
- (4) 共通語と方言の使い分けと地域との関係を調査した田中・前田（2012）によると、東海地域は「消極的使い分け派」に分類される。それは生育地の方言への好意度は低いものの、異郷の友人にも方言を使うこともあり、使い分け意識が高いわけ

ではないという特徴をもつ。しかし、関東方面では方言を控えるというコメントからは、むしろ積極的に使い分けをしているように思われる。これは女子学生からのものであるため、静岡方言は女性らしくないというイメージがあるのかもしれない。

- (5) この点で、静岡方言は、佐藤・米田（1999）における「イメージ希薄方言」にあてはまるかもしれない。
- (6) 加藤（1995）は、金沢という都市イメージと金沢方言のイメージのずれについて指摘し、また、金沢の方言話者のもつ「隠れたコンプレックス」について述べている。この点は、静岡大学の学生への意識調査にみる、静岡、もしくは静岡方言に対するイメージの希薄さ、もしくは田舎でもなく都会でもないといったイメージと、現実の静岡方言の響き（意外と田舎っぽい）のずれや、方言を堂々と使いにくいといった、県内出身者が抱く（あまり吐露しないが、実はある）「方言コンプレックス」などにも共通するものと思われる。
- (7) 浅見光彦倶楽部（2006：42）を参照のこと。
- (8) 『ユタが愛した探偵』を参照のこと。
- (9) 浅見光彦倶楽部（2006：56）を参照のこと。
- (10) 内田康夫の小説には沖縄を舞台にしたものもあるが、沖縄方言の具体例はでてこず、金城カメという老婆（ユタ）の「言葉は何を言っているのか、浅見にはさっぱり聞き取れなかった」り、「外国にいるのと変わらないチンブンカンブン」だと吐露するばかりである。また、沖縄方言の語彙はカタカナ（例、マブイトウシ）で表記されている。このことから、内田の小説では、沖縄方言があたかも外国のことばとして、完全に他者化されて描かれていることが分かる。詳細は『ユタが愛した探偵』を参照のこと。

参考文献

- 浅見光彦倶楽部（2006）『浅見光彦 the Complete 華麗なる100事件の軌跡』メディアファクトリー
- 井上史雄（1977a）「方言イメージの多変量解析（上）」『言語生活』311 pp. 82-91
筑摩書房

- 井上史雄 (1977b) 「方言イメージの多変量解析 (下)」『言語生活』312 pp. 82-88
筑摩書房
- 井上史雄 (1989) 『言葉づかい新風景 (敬語と方言)』秋山書店
- 加藤和夫 (1995) 「隠れた方言コンプレックス」『言語』24-12 pp. 74-85 大修館書店
- 加藤丘 (1998) 『東海道島田方言考』リュウウ印刷
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 熊谷滋子 (2017) 「方言イメージが作り上げるドラマーNHK 地域ドラマが再生産する
地域ステレオタイプ」『ことば』38 pp. 11-28 現代日本語研究会
- 言語編集部 (1995) 『変容する日本の方言 全国14地点、2800名の言語意識調査』(『言語』24-12) 大修館書店
- 佐藤和之・米田正人編著 (1999) 『どうなる日本のことば 方言と共通語のゆくえ』
大修館書店
- 田中ゆかり (2011) 『「方言コスプレ」の時代』岩波書店
- 田中ゆかり (2016) 『方言萌え! ?—ヴァーチャル方言を読み解く』岩波ジュニア新書
- 田中ゆかり・前田忠彦 (2012) 「話者分類に基づく地域類型化の試み—全国方言意識
調査データを用いた潜在クラス分析による検討—」『国立国語研究所論集』
3 pp. 117-142
- 山口幸洋 (1987) 『静岡県の方言』静岡新聞社

参考引用作品

(すべて内田康夫の小説であるが、初版のものとは限らない。以下、出版社別にまとめる)

角川文庫

『杜の都殺人事件』(1985)、『朝日殺人事件』(1996)、『喪われた道』(2000)、『天城峠殺人事件』(2006)、『鄙^{ひな}の記憶』(2006)、『遺譜 上』(2017)

光文社文庫

『遠野殺人事件』(1987)、『秋田殺人事件』(2004)、『ユタが愛した探偵』(2017)

講談社文庫

『御堂筋殺人事件』(1999)、『^{くれない}紅^{ひと}藍の女』殺人事件』(2000)、『中央構造帯』(2002)

その他

『白鳥殺人事件』（1999）徳間文庫、『悪魔の種子』（2010）幻冬舎文庫

『日蓮伝説殺人事件』（2017）実業之日本社

（くまがい しげこ：静岡大学）

（2019.10.30 受理）